In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	文献探訪 Book Review： 山鳥重『「わかる」とはどういうことか?： 認識の脳科学』ちくま新書、2002 年 4 月 20 日、236 頁、720 円+税 ： ISBN4-480-05939-0
Author	井狩, 幸男
Citation	大阪市立大学大学教育. 11 巻 2 号, p.87-89.
Issue Date	2014-02
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171218-103

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

文献探訪　Book Review

井狩幸男（文学研究科・大学教育研究センター）

山鳥　重
『「わかる」とはどういうことか？認識の脳科学』
ちくま新書、2002年4月20日、236頁、720円＋税
ISBN4-480-05939-0

私の専門は、神経心理言語学という分野です。この分野は、心理言語学と神経言語学の融合分野で、文系と理系の両方の要素が入り交じっています。その中でも特に、乳幼児の母語獲得と脳内の言語処理を研究しています。今回ご紹介するのは、神経心理学の研究者で失語症の専門医の山鳥重先生が書かれた書物です。

失語症になると、これまで普通にわかっていたことがわからなくなります。そういう患者さんを診てこられた山鳥先生が、わかるとはどういうことかを考えずにおられなくなったということを想像するのは難しくありません。本書は、山鳥先生のそのような日常経験から生まれました。

日頃、私たちは、わかるということをさまざまな場面で経験します。しかし、わかるとはどういうことかについて考えることは、ほとんどありません。このわかることの仕組みがわかると、わからない状況に置かれた時に、どのように対処すればよいのかが見えてきます。そんな時に、本書は非常に役立ちます。少なくとも私は、本書を読んで以来、わからない時には、わかるために必要な条件のどの部分が欠けていてわからないのかを考えるようになりました。また、そうすることで、以前と比べて冷静に対処できるようになったと感じています。それでは以下で、本書の概略をお話しします。

まず、わかるとはどういうことなのでしょうか。山鳥先生は次のように考えています。わかるためには、記憶することが大切です。また、一口にわかると言っても、（**1**）全体像が見える（**2**）分類する（**3**）筋が通る（**4**）空間関係を把握する（**5**）仕組みを理解する（**6**）規則が見つかる、というように、さまざまなわかる状態が存在します。それから、どんな時にわかったと感じるかというと、（A）直感する（B）まとまる（C）ルールを発見する（D）置き換える、といういくつかの場合があります。ここで山鳥先生の言われていることを整理すると、何かがわかるというのは、関連するもの同士の間で、何らかの関係性が見出されることに他ならないことがわかります。

次に、わかるためには何が必要でしょうか。特別なものは要らないと山鳥先生は考えられています。人はわからない物や事に出くわした時、そこに意味を見出そうとします。このことから、わかろうとする、あるいは、わかりたいという気持ちは、生来備わっていると考えられます。しかし、それだけでは、わかることはできません。わかるためには、記憶されている知識が網の目のように張り巡らされていることが、重要になります。また、わかっていないことに気づくことも大切です。さらに重要なのは、作動記憶（ワーキングメモリ）と呼ばれる脳内の情報処理の仕組みを利用して、注意を払って意識的に取り込んだ情報を、瞬時に処理することです。そして、実際にそのことをやってみることで、理解が促進されることがあります。

それから、山鳥先生は、本書の後の方で、わかることに関連するいくつかの側面に触れられています。わかり方には水準があり、わかればそれで終わりということではありません。本当の意味でわかるためには、細部についてわかるだけではなく、大局がわからなければならないのです。また、わかり方は、理解の程度によって異なります。わかった時点でそこに留まっていれば、理解は進まず、浅いままになります。より深くわかるためには、たゆまぬ努力が必要です。

また、わかり方には、自分の内側の情報と重ね合わせることにより整合性を確認する方法と、わかった時の答を自分の外に求める方法の**2**種類あると山鳥先生は述べられています。前者は、自分と外部との関係性、後者は、自分以外の外部の関係性の確立を意味しています。たとえば、中学や高校で未修得の内容を大学で学び、正しく理解しようとする時、最初は、既存の知識を基に理解しようとし、うまく行かない場合、新たに仮説を立て、関係を理解しようと努めます。このことから、人は常に、自分の関わる世界をわかろうとする存在であると言えます。

本書は、日頃ほとんど考えることのない、わかるということに焦点を当て、その働きについて、難解な表現を用いずに多面的に検討することを試みた好著です。山鳥先生のわかることに込められた思いは、次の表現の中に窺うことができます。

わかる、というのは秩序を生む心の働きです。秩序が生まれると、心はわかった、という信号を出してくれます。つまり、わかったという感情です。その信号が出ると、心に快感、落ち着きが生まれます。（p. **181**）

上の内容は、本書の冒頭で、心を構成する要素には、大別して、感情と思考があると述べられていることと併せて考えると、よくわかると思います。

また、山鳥先生の多くの著書には、私の専門に関係する言語についての示唆に富む考察が沢山あります。本書も同様で、言語教育を考える上で有用と思われる思索が随所に見られます。ここでは、その中から２つ取り上げて、紹介します。

まず、言語の形式と意味に関する記述です。

記号（単語の音韻部分）自体は無意味です。記号だけ見ても、聞いても、何かが理解できるわけではありません。音韻が自分の中の記憶心像と響き会わないと、意味は出現してこないのです。（p.**56**）

意味を伴わない、音声のような形式だけでは、言語は成立しないという、著者の強い思いが伝わってきます。

次に、言語を使用する中で、意味の重要性について考察されている箇所を紹介します。

言葉は頭を整理する道具ですが、音だけを気分で使っていると、頭の方がそれに馴れてきて、聞き馴れぬ言葉を聞いても、「それ何？」と問いかけなくなります。頭の中を記号だけが流れるようになります。

その記号の意味を問う、という自然な心の働きがなくなってしまいます。心から好奇心が失われ、心になまけぐせがつきます。もっとも危険な状態ですね。わかる、の原点は後にも先にもまず、言葉の正確な意味理解です。ここをおろそかにしてはなりません。（p.**58**）

わかるという視点から、母語と外国語の違いに関係なく、形式と意味を関連づけ、正確に意味を理解した上で言語を使用することがいかに重要であるかということを、改めて考えさせられます。

ところで、話は少し変わりますが、私は、学部生や院生が大学（院）在学中に「なぜ」という、答がすぐに出ない問いかけを沢山して欲しいと願っています。「なぜ」は、観察される現象の根本に関わるからです。このこととの関連で、最後に、本書の第 **6** 章第 **1** 節「「わかりたい」と思うのはなぜか」を取り上げます。山鳥先生は、エントロピーの法則を用いて、わかりたいと思う理由について説明を試みられています。自然状態ではエネルギーが均等になろうとするために、エントロピーは増大し無秩序に向かうのに対し、秩序を維持している生命体は、エントロピーを減少させる方向に向かい、秩序を増大させようとする存在と捉えます。この観点に立つと、意味がわからない時にわかりたいという思いは、エントロピーを減少させて秩序を増やそうとする作用の表出と考えられます。

われわれは何にでも意味を見つけたがります。どんなものでも意味がなければ落ちつきません。意味とは、とりもなおさず、わからないものをわかるようにする働きです。（p.**180**）

この説明は、ヒトはなぜ言語を獲得できるのかという問いに対する答を考える際にも有用です。これまで、言語能力の生得性や言語獲得装置という概念で説明されてきたことが、実はその根底にエントロピーが作用しているとわかった時、目から鱗が落ちたような気分でした。

以上、山鳥先生の数多くのご著書の中から、わかることを題材とした本書を紹介させていただきました。私事になり恐縮ですが、所属の研究会の企画によるオ

ープンフォーラムが2005年9月に大阪市立大学文化交流センターホールで開催されるに当たり、テーマが「脳・心・ことば」に決まり、山鳥先生にご講演とその後のシンポジウムのコメンテーターをお願いしたことがありました。お会いしてお話をさせていただいて、先生の実直なお人柄に触れることができ、改めて先生の魅力を感じました。本書を手にされた読者は、山鳥先生の知識の広さや深さだけでなく、眼差しの向こうに温かさを感じられることでしょう。